慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文殊五尊像の形成と展開
Sub Title	The formation and development of Manjusri pentads
Author	増田, 政史(Masuda, Masafumi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.148 (2021. 10) ,p.269- 296
JaLC DOI	
Abstract	Group images of the bodhisattva Manjusri with attendants are based on the Flower Garland Sutra and the belief that Manjusri lived at Mount Wutai during the Tang dynasty. The iconography of such group images is thought to have been transmitted to Japan by Buddhist monks who visited Tang and Song dynasty China during the Heian period. The composition of existing examples in Japan is generally of Manjusri accompanied by four attendants, forming a pentad. After their transmission from China, Manjusri pentads developed in a distinctive way in Japan. In Kamakura-period Nara, Manjusri came to be used as the main object of worship. While Manjusri usually wears Chinese-style clothes, in case of the pentads, where Manjusri serves as the principal image, Manjusri came to be portrayed with five topknots. In other words, the appearance of Manjusri was altered in Japan. Concerning the copying of Manjusri pentads, it appears that the Manjusri pentad at Abe Monjuin temple in Nara, which was carved in the early Kamakura period, was frequently copied by artisans carving sculptures for the Saidaiji Temple cult in Nara. Through these developments, Manjusri pentads attained a significant presence in the old capital of Nara during the Kamakura period.
Notes	特集：林温教授 退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000148-0269

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese

Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文殊五尊像の形成と展開

増　田　政　史*

The Formation and Development of Manjusri Pentads

Masafumi Masuda

Group images of the bodhisattva Manjusri with attendants are based on the *Flower Garland Sutra* and the belief that Manjusri lived at Mount Wutai during the Tang dynasty. The iconography of such group images is thought to have been transmitted to Japan by Buddhist monks who visited Tang and Song dynasty China during the Heian period. The composition of existing examples in Japan is generally of Manjusri accompanied by four attendants, forming a pentad.

After their transmission from China, Manjusri pentads developed in a distinctive way in Japan. In Kamakura-period Nara, Manjusri came to be used as the main object of worship. While Manjusri usually wears Chinese-style clothes, in case of the pentads, where Manjusri serves as the principal image, Manjusri came to be portrayed with five topknots. In other words, the appearance of Manjusri was altered in Japan. Concerning the copying of Manjusri pentads, it appears that the Manjusri pentad at Abe Monjuin temple in Nara, which was carved in the early Kamakura period, was frequently copied by artisans carving sculptures for the Saidaiji Temple cult in Nara. Through these developments, Manjusri pentads attained a significant presence in the old capital of Nara during the Kamakura period.

* 東京国立博物館

はじめに

知恵の仏として知られる文殊菩薩は，日本で古くから信仰されてきた尊格の一つである．独尊としてあらわされる場合のほか，各種の経典に基づき，複数の尊像からなる一具として造顕されることもある．釈迦如来に普賢菩薩とともに付き従い，釈迦三尊像の脇侍となる例がよく知られ，また，『維摩経』に基づき，維摩居士像と対になる文殊菩薩像もある．

そのなかにあって，文殊菩薩を中尊として脇侍が付き従う群像形式がある．中国に端を発し，その後，日本でも受容されていった．とくにその尊像構成に着目してみると，中国では群像の数にいくつかのバリエーションがあるものの，日本の彫刻作例ではほとんどが五尊像の形式であらわされる．この文殊五尊像がどのように形成され，そしてどのように展開していったか，その変遷を考えることが本稿の目的である[1]．

1.　文殊菩薩の群像形式

(1)　中国における文殊菩薩の群像形式

まず，中国における文殊菩薩の群像形式の成立について見ていきたい．文殊菩薩が群像形式をとる源流として，東晋時代に活動した仏馱跋陀羅（359～429）が訳した『華厳経』（六十華厳）が挙げられる．この『華厳経』「菩薩住処品」に次の記述がある[2]．

> 東北方有菩薩住処．名清涼山．過去諸菩薩常於中住．彼現有菩薩．名文殊師利．有一万菩薩眷属．常為説法．

すなわち，東北の方角に清涼山という山があり，そこで文殊菩薩が一万の眷属に説法をしているというのである．仏馱跋陀羅がインドの人物であったことから，頼富本宏氏は，「（インドの）東北方に清涼山という所があり，そこに文殊菩薩が住しているという」としている[3]．この段階では，

まだ文殊菩薩の住むところが清涼山であるとしかされておらず，場所についても漠然とインドの東北方であることしか分かっていない．しかしその後，唐時代ごろにはこの清涼山に，中国に実在する五台山があてられるようになる．五台山は山西省東北部に広がる標高の高い山で，頼富本宏氏によれば[4]，清涼山と五台山が結び付けて考えられるようになった典拠は，唐時代の菩提流志訳『文殊師利法宝蔵陀羅尼経』の次の記述であると思われる[5]．

> 爾時世尊復告金剛密迹主菩薩言．我滅度後於此贍部洲東北方．有国名大振那．其国中有山号曰五頂．文殊師利童子遊行居住．為諸衆生於中説法．

「大振那」とは中国のことを指す．つまり，中国の「五頂」という名の山に文殊菩薩が住んで衆生に説法をしている，としている．文殊菩薩の住処について「東北方」という方角を示していることから，先の『華厳経』「菩薩住処品」の記述を受けていると考えられる．しかしここではさらに「五頂」と限定している点を，この時代の新しい解釈として捉えることができよう．『文殊師利法宝蔵陀羅尼経』には「五台山」という言葉そのものは出てこないが，五台山は，中台，東台，南台，西台，北台という五つの峰からなる山岳地帯で，それらを指して「五頂」と呼ばれた例もあるという[6]．唐時代には『古清涼伝』，時代が下った宋時代には『広清涼伝』が撰述され，それらには五台山での奇瑞や霊異，文殊菩薩の化現に関することが記されている[7]．このようにすでに存在していた民俗的，歴史的背景とあいまって，唐時代には，五台山に文殊菩薩が住むという信仰が成立していたと考えることができよう．すなわち，五台山（清涼山）に住む文殊菩薩は，『華厳経』に説かれるように多くの眷属に囲まれて彼らに説法をするというイメージができあがっていたのであろう．五台山は文殊菩薩の聖地とさ

れ[8]，五台山に文殊菩薩が住むという信仰は，五台山文殊と呼ばれる[9].

さて，その後の盛唐期，中唐期に至ると五台山文殊への信仰にさらなる発展が見られたようである．五台山には，密教の不空（705～774），浄土教の法照，華厳宗の澄観（738～839），天台宗の志遠といった著名な僧侶たちが入山していった．しかし，それらの異なる宗派は互いに敵対することはなく友好的でゆるやかな関係にあり，むしろ双修的傾向を強く持っていたと指摘されている[10]．そのなかでも，五台山文殊への信仰にとくに熱心だった人物として不空が挙げられる[11]．不空は，当時の皇帝である代宗（726～779）に厚く重用され，五台山文殊信仰を国家事業として推し進め，全国規模での文殊信仰を広めることに尽力した人物である．代宗の時代は，安史の乱や僕固懐恩の乱など，国家の存在が揺るがされる危機に直面しており，皇帝の権威が失墜しつつあった．岩崎日出男氏は，このような状況のなか，不空が当時，民衆に信仰されていた五台山文殊信仰を皇帝や朝廷に結び付けたと指摘している[12]．すなわち，五台山文殊には鎮護国家の性格があり，国を治める皇帝や朝廷にとって信仰すべき対象であるとしたのである．そしてそれは，中国全土へと広がりを見せていった.

しかしながら，武宗（814～846）の時代になると，武宗による仏教弾圧（いわゆる会昌の廃仏）によって，五台山文殊信仰は一時的に衰えをみせる．その後，宋時代になり，太宗（939～997）の時代に復興されたようである．その後の五台山文殊信仰について，頼富本宏氏は，五台山のチベット仏教化，すなわちラマ教と密接に結び付いたと指摘している．五台山にチベット系仏教が伝わったのは元代であり，現在の実例の半数以上はこの範疇に属するという[13].

さて，『華厳経』「菩薩住処品」の前掲記述を源流として成立した五台山文殊であるが，同記述中には文殊菩薩が一万の眷属とともにいることも記されている．一万という数に特定の意味があるかは別として，複数の眷属に囲まれていると考えられていたことは確かであろう．現存する中国の作

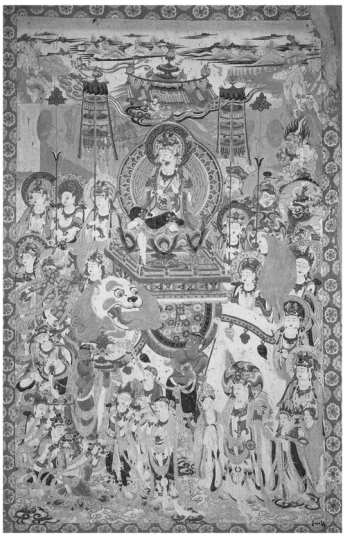

図 1　文殊菩薩図　中国・敦煌莫高窟 159

例を見てみると，文殊菩薩の群像形式が具体的な様相をともなって成立して発展した唐時代から宋時代の遺例が，絵画や壁画を中心に残されているが，そこにあらわされる文殊菩薩の眷属の数は一定していない．敦煌莫高窟 159 文殊菩薩図（9 世紀）（図 1）や敦煌伝来のフランス・ギメ東洋美術館五台山文殊菩薩化現図（10 世紀末から 11 世紀初め）（図 2），宋より請来された京都・清凉寺釈迦如来立像の納入品のうち，宋代版画の文殊菩薩図（10 世紀）（図 3）など，眷属の数にバリエーションがいくつかあることが確認できる．つまり，中国においては様々な解釈がなされていたと考えることができよう．

ただし，後述するように日本での文殊菩薩の群像形式のほとんどが五尊像であることを考えると，中国でもある程度は五尊像の形式が定まっていたのではないだろうか．敦煌伝来のパリ国立図書館文殊五尊図（9 世紀）（図 4）では，文殊菩薩を含む五尊の群像が描かれている．獅子に乗る文

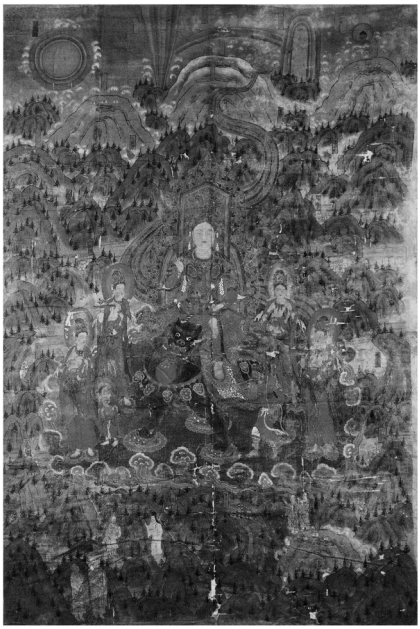

図 2　五台山文殊菩薩化現図　フランス・ギメ東洋美術館

殊菩薩と，獅子を引く馭者，獅子の前を行く童子の三者は一組として描かれていると見てよいと思われるが，向かって左上に描かれる僧侶と老人との関係がどのようなものであるかは明らかにし難い．しかし整然な五尊形式ではないものの白描画ということも考慮すると，五尊を描く図像的な意味は重要と思われる．さらに日本の 13 世紀の作例ではあるが，京都・醍醐寺五台山文殊図（諸文殊図像のうち）（図 5）は，宋代仏画を手本として制作されたものと考えられている[14]．こちらは整然とした五尊形式を構成しており，9 世紀のパリ国立図書館本よりも時代が進んだ印象を受ける．画面上部の五つの峰は，五台山をあらわしたものであろう．また鎌倉時代の 13 世紀の作とされる，東京国立博物館文殊菩薩及び眷属図（図 6）と

図 3　文殊菩薩図（釈迦如来立像納入品のうち）　京都・清涼寺

図 4　文殊五尊図　フランス・パリ国立図書館

アメリカ・クリーブランド美術館文殊菩薩及び眷属図の両作例は，画面構図や尊像構成が類似しており，ともに宋代仏画に基づく作例と考えられて

図 5　五台山文殊図（諸文殊図像のうち）　京都・醍醐寺

図 6　文殊菩薩及び眷属図　東京国立博物館

いる．これらには文殊菩薩を含む五尊のほかに二菩薩も描かれるが，やはり文殊菩薩と四侍者が主要な構成尊格であると思われる．以上から考えると，少なくとも宋時代には五尊形式の構成がある程度定まっていたと考えられる．

(2)　日本における文殊五尊像

次に，中国で五台山文殊として成立および発展した文殊菩薩の群像形式が，日本にどのように受容され，五尊像が形成されたか確認していく．

日本へ文殊菩薩の群像形式を請来した人物は，先行研究により比叡山延暦寺の僧である円仁（794～864）が最も早いとされる．円仁は承和 5 年（838）に唐へ渡って各地を巡った．そのときの巡礼の様子を『入唐求法巡礼行記』に詳細に記している．また円仁は在唐中に五台山にも登頂しており，そこに文殊菩薩の像が安置されているのを拝したことも記している．さらに円仁は帰国後，比叡山の造営のなかで文殊楼を建立し，そこに文殊菩薩を中心とした群像を造像して安置している．『阿娑縛抄』巻二〇一「諸寺縁起下」の該当する記述を次に示す[15]（〈　〉内は割書き.）.

文殊楼院.
葺檜皮五間二重楼一基.〈高五丈三尺．広五丈三寸．維三丈八尺.〉
　安置正体文殊坐像一軀.〈高四尺八寸.〉
　乗化現文殊師子像一頭.〈高八尺.〉
　脇侍文殊立像四軀.〈高五尺二寸.〉
　侍者化現文殊童子立像一軀.〈高五尺二寸.〉
　師子御者化現文殊丈夫立像一軀.〈高五尺二寸.〉
右院慈覚大師草創也．大師伝云．入唐求法之日．巡礼五台山之時．感遙文殊化現師子聖燈円光．於是大師欣感発念.

つまり，「正体文殊坐像」一軀，「師子像」一頭，「脇侍文殊立像」四軀，「童子立像」一軀，「丈夫立像」一軀，ということから分かるように，群像形式であったことが確認できる．なお，宇野茂樹氏は主尊である「正体文殊坐像」と「師子像」について，円仁が五台山菩薩堂院で見た文殊菩薩を範とした可能性が高いと指摘している[16].

次に文殊菩薩の群像形式の日本への請来に関連する人物として，東大寺の僧の奝然（938～1016）が指摘されている[17]．奝然もまた中国へ渡った僧で，当時は宋時代であった．治承年間（1177～80）成立の今様歌謡の『梁塵秘抄』には次のように歌われている[18].

文殊は誰か迎へ来し，奝然聖こそは迎へしか　迎へしかや，伴には優塡国の王や大聖老人　善哉童子の仏陀（波）利，さて十六羅漢諸天衆

尊像構成については後述するが，これらの尊名は文殊五尊像にあてられたものであり，そして文殊五尊像を奝然が請来したと一般的に理解されていたのである．奝然が円仁のようにこれらの尊像から成る群像の造像を行なったなどの記録は確認されていないものの，宋から文殊菩薩像を請来したことや[19]，少なくとも『梁塵秘抄』の成立期とされる 12 世紀後半[20] には，奝然が文殊五尊像を請来したことが広く認識されていたという事実は留意しておきたい[21]．しかも「優塡国の王」，「大聖老人」，「善哉童子」，「仏陀（波）利」といった具体的な尊名が記されることは，当時，日本でも五尊像の形式が認識されていたことを示すものである．

日本の彫刻作例で文殊菩薩を中尊とする群像が作られる場合，そのほとんどが五尊形式であることについてみていきたい．日本に現存する文殊五尊像では，11 世紀後半の高知・竹林寺文殊五尊像が最も早い時期の作例で，その後，時代がやや下り，12 世紀後半の岩手・中尊寺大長寿院文殊五尊像（図 7），山形・本山慈恩寺の文殊菩薩の群像（善財童子像は亡失）な

図 7　文殊五尊像　岩手・中尊寺大長寿院

どが宋代美術の形式を取り入れた像容をしている．その顕著な例として，文殊菩薩が着る襠襠衣が挙げられる．この着衣は宋代美術にみられるもので，11 世紀の竹林寺像にはまだみられず，12 世紀の中尊寺大長寿院像や本山慈恩寺像に採用されることから，このころから宋代美術に図像の典拠をおく文殊五尊像の造像が行なわれるようになったと思われる．

中尊寺大長寿院五尊像と本山慈恩寺の群像はともに現在の東北地方に所在する．特に中尊寺大長寿院五尊像は経蔵の本尊の可能性が指摘されている[22]．しかし，その後の文殊五尊像の造像が流行した場は奈良（南都）で，その嚆矢は，建仁 3 年（1203）から承久 2 年（1220）にかけて快慶によって造像された奈良・安倍文殊院文殊五尊像（図 8）である（最勝老人像は慶長 12 年（1607）の補作）．安倍文殊院五尊像は『華厳経』（四十華厳）に基づく東大寺系の作例と指摘されている[23]．以降，後述するように

図 8　文殊五尊像　奈良・安倍文殊院

南都では文殊五尊像の造立が続くが，安倍文殊院五尊像の存在は大きいものであった．

次に五尊形式の脇侍である四者（童子，馭者，僧侶，老人）の尊名について整理しておきたい．各尊の尊名は現在でもいくつかの説があり，必ずしも一致していない．しかしながら，ある程度の範囲は絞れ，また以下に取り上げる脇侍の尊名については金子啓明氏による詳細な論考[24] を参考にしてそれぞれ見ていく．

童子は善財童子（善哉童子）とされることが最も多い．善膩師童子とする場合もあるが，大方は善財童子と見てよいであろう．善財童子と文殊菩薩との関係は，『華厳経』に求められる．つまり，善財童子は『華厳経』「入法界品」に登場し，文殊菩薩の導きによって，諸々の善知識を歴参する修行者として描かれる．獅子の前に立ち，一行を先導するような姿であ

ることが多い．

また，獅子を引く馭者は于闐王または優塡王とされる．于闐王は西域の于闐（ホータン）国の王で，優塡王はインドの優塡国の王である．于闐王の方は史料に頻出するため，于闐王の方が本来の名称として用いられていたと思われるが，音が同じ優塡王も用いられることがあった．八十巻から成る『華厳経』（八十華厳）を訳出した実叉難陀は，ホータン出身の僧で，ここに文殊菩薩と于闐王との関わりを見出すことができる．

中国における文殊菩薩の群像形式の作例では，先述の通り，眷属の数に様々なバリエーションが存在するが，眷属の数がどのような場合でも，基本的に童子と獅子の馭者が登場する．金子啓明氏はこの童子と馭者の組み合わせが先に出来上がり，それをもとに文殊菩薩に関係する善財童子を童子に，于闐王を馭者に任意の関連性を持たせたと推察している．

次に剃髪の僧侶は，仏陀波利（仏陀波離）とされる．もしくは釈迦十大弟子の一人である須菩提とする場合もある．仏陀波利と文殊菩薩の関係については『仏頂尊勝陀羅尼経』の序文に書かれており，すなわち，仏陀波利は西域から中国に入り五台山に登り文殊菩薩の姿を拝することを願ったバラモン僧であった．袈裟をまとい錫杖を執る，いかにも旅の修行者の姿であらわされる．

最後に，老人は大聖老人もしくは最勝老人とされ，仏陀波利と関係してくる．仏陀波利は文殊菩薩の姿を拝することを願って五台山に登ったところ，ある老人が目の前に現れた．老人は仏陀波利に『仏頂尊勝陀羅尼経』を持参したか尋ね，仏陀波利が持参していない旨を告げると，老人は文殊菩薩に会うためには『仏頂尊勝陀羅尼経』を持参すること勧めた．この時の老人こそ，文殊菩薩が化現した姿と考えられている．文殊菩薩はしばしば「大聖文殊師利」と呼ばれることもあり，大聖老人の名の由来もそこに求められると思われる．

五尊形式の脇侍の尊名は，いずれも文殊菩薩に関係することが確認でき

た．日本の 12 世紀から 13 世紀頃にはこれらの尊名で呼ばれていたと考えられている．

2. 神仏習合との結び付き

(1) 春日若宮の本地仏

日本の文殊五尊像の作例は，主に宋代仏画の形式を典拠として造顕されたものとみられるが，その後は日本独自の展開をみせるようになる．それは中尊の文殊菩薩の姿の変化である．この問題に触れる前に，奈良・春日大社における本地仏について整理しておこう．

春日大社には一宮，二宮，三宮，四宮と，保延元年（1135）に創建された若宮がある．それぞれに神が鎮座しているが，平安時代の終わりから鎌倉時代初めの頃は，神と仏を一体とみなす神仏習合の理解により，それぞれの神に本地仏があてられるようになる．すなわち，一宮は釈迦如来，二宮は薬師如来，三宮は地蔵菩薩，四宮は十一面観音菩薩，若宮は文殊菩薩，である．この文殊菩薩については，彫刻や絵画の作例において基本的に五髻文殊という密教系の姿であらわされる．坐像または立像，さらに獅子に乗る姿の場合がある．

若宮の本地仏を文殊菩薩とする説に基づいて文殊菩薩をあらわす作例として，他の本地仏とともに描かれる春日曼荼羅（春日宮曼荼羅，春日社寺曼荼羅，春日鹿曼荼羅などを含む）のほか，単独で造顕されることもある．立像のもの，獅子に乗るものなど独尊形式であるものばかりでなく，五尊形式であらわされるようになることは注目される．例えば，奈良・興福寺勧学院伝来とされる東京国立博物館文殊五尊像（図 9）（文永 10 年〈1273〉）は，かつて獅子の像内に納められ，現在は大東急記念文庫に所蔵される納入品によると，興福寺僧の経玄が夢中で童子と出会い，年来願っていた文殊菩薩の造像を行なったという[25]．この童子については，春日若宮の本地仏である文殊菩薩の稚児の姿であることが指摘されている．すなわち，東

図 9　文殊五尊像　東京国立博物館

博五尊像は春日若宮への信仰のなかで作られた作例といえよう．また，奈良国立博物館春日文殊曼荼羅（14 世紀）（図 10）には，五髻文殊を中尊とした五尊像が描かれる．注目すべきは画面上方に春日山が描かれており，文殊五尊像が春日若宮の本地仏として描かれた作例であることがわかるだろう[26]．興味深いのは，東博五尊像や奈良博本の文殊菩薩の姿が，通例の五尊像にみられる襤褸衣をまとう姿ではなく，五髻を結い上げ，条帛や天衣をまとう密教系の文殊菩薩の姿であることである．すなわち，単に五尊形式を採用したのではなく，中尊の文殊菩薩を密教系の姿に置き換えている点に特徴を見出すことができる[27]．このように，文殊五尊像が若宮の本地仏としても用いられるようになったといえよう．

ここで考えておきたいのは，文殊五尊像を本地仏としてあらわす現象が春日若宮の本地仏以外にも盛んであったのかという問題である．いま，他社に鎮座する神の本地仏として作られた，もしくは作られたと考えられる

図 10　春日文殊曼荼羅　奈良国立博物館

作例のうち，五尊形式が流行した様子はただちには見当たらない．文殊五尊像の形式が南都で流行したがゆえに，南都に所在する春日大社のうち，文殊菩薩を本地仏とする春日若宮への信仰と結び付いたことを示唆するのではないだろうか.

(2)　脇侍における神仏習合

なお，文殊五尊像の神仏習合に関する事例として，安倍文殊院五尊像に触れておきたい．安倍文殊院に関する近世の史料である『和州安倍山崇敬寺来由記』（元禄 11 年〈1698〉）には，脇侍像について次のように言及されている[28]（〈　〉内は割書き.）.

又刻天照皇太神〈或言善財童子〉長四尺二寸合掌瞻仰，八幡大菩薩〈或言優塡王〉長七尺三寸両手搴縄春日大明神〈或言仏陀波利三蔵〉長五尺九寸執持錫杖住吉大明神〈或言最勝老人並是伝説未見典拠〉長五尺九寸両手把杖四神之像安立法隅以為侍者

この史料が成立したころには，天照皇太神と善財童子，八幡大菩薩と優塡王，春日大明神と仏陀波利三蔵，住吉大明神と最勝老人がそれぞれ結び付けて考えられていたことが分かる．すなわち，脇侍像にそれぞれ日本の主要な神をあてている．もちろん，いずれにも「或言」として「善財童子」,「優塡王」,「仏陀波利三蔵」,「最勝老人」といった，通例の文殊五尊像に用いられる尊名を記しているから，文殊菩薩の脇侍ととらえる意識もあったのであろうが，それぞれを神と結び付ける見解があったことは興味深い．

3.　西大寺流と模刻

(1)　西大寺流の文殊五尊像

鎌倉時代における文殊五尊像の展開を考えるとき，とくに後期においては奈良・西大寺の存在は極めて大きい．奈良時代創建の西大寺は鎌倉時代ごろには一時衰退していたが，叡尊（1201～90）による再興により，南都のみならず諸国に末寺を有する寺院として営まれた．その信仰形態をみてみると，戒律復興を基軸として，釈迦信仰や聖徳太子信仰など，多様な形態が認められるが，とくに厚い文殊信仰があったことは従来指摘されるとおりである[29]．その特徴は非人救済[30]と追善供養[31]である．奈良時代の南都ですでに社会福祉的な意味合いを持つ文殊信仰があり[32]，慈善救済を目的として平安時代に創始された文殊会[33]を引き継ぎ，叡尊らは各地で文殊会の法会を行なうことで非人を救済してきた．このように，いわゆる西大寺流の主要人物が叡尊であることは言うまでもないが，西大寺流の文殊信

仰については，弟子の忍性（1217～1303）による影響が大きいことが指摘されている[34]．『性公大徳譜』によると，忍性は若いころ安倍寺（安倍文殊院）に参詣し，菩提心を祈っていたという[35]．この安倍文殊院の本尊は快慶が造像した文殊五尊像であり，文殊菩薩に対する信仰のみならず，この群像形式や造形は，忍性を介して西大寺流のなかでも受け継がれていったとみられる．

その具体的な作例は二つ挙げられる．まず，奈良・般若寺の文殊菩薩の群像（現存せず）である[36]．建長 7 年（1255）に叡尊が文殊菩薩像の造像を発願して善慶が着手したが，その途中で善慶が逝去したため一時中断した．その後，数年の時を経て，善慶の息子の善春がこの造像事業を引き継いで再開し，文永 4 年（1267）に開眼供養が行なわれた（『叡尊願文』）．この般若寺像は延徳 2 年（1490）に火災によって焼失したため，その像容をうかがうことは出来ないが，獅子に乗る周丈六の巨大な像であったことが知られる[37]．興味深いのは，般若寺像が完成したのち，弘安 9 年（1286）に至って興福寺僧の発願により，この文殊菩薩像に付き従う脇侍像として優塡王像と善財童子像を追加造立したことである（『優塡王善財童子像造立文』）．当初は叡尊によって独尊像として発願された獅子に乗る文殊菩薩像に脇侍像を追加したことから，西大寺流ひいては南都における文殊菩薩の群像の意義の高さが窺えよう．このとき作られた脇侍像も焼失し，般若寺には現在，優塡王像の太刀の拵，最勝老人像の左手首先[38]，獅子の石造蓮華座と推定される残欠が伝わっている．

二つ目は，西大寺文殊五尊像（図 11）である．西大寺五尊像は，文殊菩薩像の像内におびただしい数の品が納められており，これは西大寺流の造像の特徴の一つとされる．納入品および獅子像の像内墨書によれば，西大寺五尊像は叡尊没後の永仁元年（1293）に弟子たちが造像を発願し，十三回忌にあたる正安 4 年（1302）に完成したという[39]．袿襠衣をまとい獅子に乗る文殊菩薩を中尊とし，脇侍として善財童子，優塡王，仏陀波利，最

図 11　文殊五尊像　奈良・西大寺

勝老人が付き従う五尊形式である．中尊の坐法が異なるものの，全体の像容は安倍文殊院五尊像を意識したことであろう．西大寺を再興した叡尊の十三回忌に造像された像が文殊五尊像であったことは重要なことと考えられる．

ほかに西大寺に関係する可能性があるのが，奈良県生駒市の竹林寺旧蔵で，現在，奈良・唐招提寺が所蔵する文殊五尊像（図 12）である．唐招提寺五尊像はかつて竹林寺に所在していたが，明治時代に唐招提寺へ移された[40]．竹林寺は忍性にとって重要な寺院の一つで，忍性没後，彼の遺言によって遺骨が，神奈川・極楽寺と奈良・額安寺とともに，竹林寺にも施入されている[41]．実際，竹林寺五輪塔に納置されていた品のなかに忍性の骨蔵器が含まれている．このように忍性に由縁の深い地に伝わった唐招提寺五尊像は，西大寺流による信仰下によって造像された可能性が指摘されて

図 12　文殊五尊像　奈良・唐招提寺

いる[42].

以上は奈良の地に伝わる作例，もしくは存在していた作例だが，京都に現存する作例も見過ごせない．すなわち，京都・金戒光明寺に伝わる文殊五尊像（図 13）である．金戒光明寺五尊像は，X 線撮影によって文殊菩薩像の頭部内に金属製の容器が確認されている[43]．このことから西大寺流との関連が想定されており，金戒光明寺像も西大寺流の作例として造像された可能性が考えられる．金戒光明寺に伝わる前には宝幢寺という寺院に安置されていたとされるが，それ以前の来歴は知られない．作風から鎌倉時代後期とされるものの（善財童子像は近年の補作），造像背景についてはただちに詳らかにしがたい．

以上，鎌倉時代の西大寺流における文殊五尊像をみてきた．もっとも，脇侍像などは失われることも多く，現在独尊として伝わる作例も，もとは脇侍像が付随していた可能性もある．しかし，これまでみてきたように，西大寺流のなかで文殊五尊像が重視されていたことは認めても良いであろう．

図 13　文殊五尊像　京都・金戒光明寺

(2)　文殊菩薩像の模刻

さて，西大寺流における文殊五尊像の作例についてみてきたが，次に中尊の文殊菩薩像に焦点をあてて考えてみたい．先述の通り，西大寺流の文殊信仰は忍性によるところが大きく，しかも忍性が若い頃に参詣した安倍文殊院の五尊像は西大寺流にとって重要な存在であった．ところで，鎌倉時代には，霊験のある像の模刻像などが作られる事例が多く確認される．例えば，清涼寺式釈迦如来像や善光寺式阿弥陀三尊像がその代表である．文殊菩薩像についてはあまり指摘されていないが，西大寺流の造像作例のなかにいくつか安倍文殊院像の図像表現や造形様式を模しているものがある．

まず，前出の金戒光明寺像である．金戒光明寺像は一見すると襤褸衣をまとい片足を踏み下げるという，鎌倉時代にあっては通例の文殊菩薩の図像表現であるが，頭部に着目してみると，通常の一髻の周囲に小さな髻を七つ配している点が特徴である．これについては慎重に検討しなければならないが，このような特異な図像表現を取り入れながらも，全体の像容は

図 14　文殊菩薩像　京都・大智寺

安倍文殊院像を忠実に踏襲しているといえよう．なお，金戒光明寺五尊像は先述の通り，西大寺流との関連のなかでの造像とみられる[44].

次に独尊ではあるが，京都・大智寺文殊菩薩像（図 14）にも触れておきたい．大智寺は鎌倉時代後期に西大寺の慈真が復興した寺院で，大智寺像の造立にも関与したとされる[45]．この大智寺像もまた，安倍文殊院像に図像表現や造形様式が酷似している．寺伝では「安阿弥」の作としているが，安倍文殊院像を安阿弥陀仏つまり快慶が造像したことから，大智寺像の作者に「安阿弥」という仏師名をあてているのは，安阿弥陀仏すなわち快慶の手による安倍文殊院像を意識してのことであろう[46].

さらに時代は下るものの，奈良県橿原市にある興善寺の文殊五尊像（図 15）の存在も興味深い．興善寺五尊像は文殊菩薩像の像内銘文から寛正 4 年（1463）に定英によって造像されたことがわかり，全体的に群像と

図 15　文殊五尊像　奈良・興善寺

しての統一が計られている[47]．文殊菩薩像は表現が形式化されているものの，やはり安倍文殊院像を手本にしているとみられる．興善寺は中世には西大寺末寺であったことが分かり，興善寺五尊像も西大寺流の流れを汲む可能性が考えられよう．

おわりに

これまでみてきたように，文殊菩薩が複数の脇侍を従える群像形式は，中国において『華厳経』を典拠として唐時代ごろに成立し，日本へは平安時代以降に入唐僧や入宋僧らを介して受容されたと考えられる．そして平安時代末期から鎌倉時代初期にかけては，宋代美術の形式を取り入れていった．そのなかでも群像の構成については，中国である程度定まりつつあった五尊形式が日本では主流となり，形成されていった様相が現存作例からうかがえる．

文殊五尊像は鎌倉時代に南都で流行し，その嚆矢として鎌倉時代初期に

造像された安倍文殊院五尊像の存在は，のちの時代にも影響を及ぼしたものと考えられる．また文殊五尊像は神仏習合とも結び付くようになる．それは春日大社の若宮の本地仏が文殊菩薩とされ，文殊菩薩が一宮，二宮，三宮，四宮の本地仏とともにあらわわされるばかりでなく，単独での彫刻や絵画が作られるようになり，そこでは文殊菩薩が独尊としてだけでなく，密教系の五髻文殊に姿をかえて脇侍を従えた五尊像としてあらわされたことは日本的な展開といえよう．鎌倉時代後期に至ると，安倍文殊院に参詣した忍性が属した西大寺流の教団の文殊信仰のなかで，般若寺の群像（脇侍像は追加造立）や西大寺五尊像が作られた．さらに安倍文殊院五尊像，特に中尊の文殊菩薩像を模した像が南都を中心にいくつか作られるようになることから，その影響力が窺えよう．

以上のことから，鎌倉時代初期から後期にかけて，文殊五尊像はそれぞれの信仰と結びつきながら展開し，南都における文殊信仰の隆盛に重要な存在であったと考えられるのである．

〔附記〕 本年，慶應義塾大学を定年退職された林温先生には，筆者が大学在学中より今日に至るまで温かい御指導を賜り，この場をお借りして心より感謝申し上げます．なお，本稿は，JSPS 科研費 JP19K23032 研究活動スタート支援「鎌倉時代における文殊菩薩造像の伝播に関する調査研究」（研究代表者 増田政史）による研究成果の一部です．

註

[1] 文殊五尊像の主な先行研究は次の通り．
金子啓明「文殊五尊図像の成立と中尊寺経蔵文殊五尊像（序説）」『東京国立博物館紀要』18，1983 年．同「12・3 世紀における文殊五尊像の展開」『鹿島美術財団年報』6，1989 年．同『文殊菩薩像（日本の美術 314）』至文堂，1992 年．
高瀬多聞「文殊五尊図像に関するいくつかの問題」『美術史研究』28，1990 年．

[2] 『大正新脩大蔵経』9，590 頁 a.

[3] 頼富本宏「五台山の文殊信仰」『密教学研究』18，1986 年（のち宮坂宥勝・松長有慶・頼富本宏編『密教大系』10　密教美術 I，1994 年に所収）．

[4] 前掲註 3 頼富論文.
[5] 『大正新脩大蔵経』20，791 頁 c.
[6] 前掲註 3 頼富論文.
[7] 崔福姫「五台山文殊信仰における化現」『仏教大学大学院紀要』33, 2005 年.
[8] 吉田靖雄「文殊信仰の展開―文殊会の成立まで―」『南都仏教』38, 1977 年（のち「文殊信仰の展開」と改題して，同『日本古代の菩薩と民衆』吉川弘文館，1988 年に所収）.
[9] 渡海文殊とも呼ばれる．田中喜作「文殊渡海」『画説』58，1941 年．同「「文殊渡海」追記」『画説』60，1941 年．大串純夫「渡海文殊像について」『美術研究』131，1943 年.
[10] 前掲註 1 金子 1992 書籍.
[11] 向井隆健「不空三蔵の文殊菩薩信仰」『大正大学研究紀要』70，1985 年．岩崎日出男「不空三蔵の五台山文殊信仰の宣布について」『密教文化』181，1993 年．同「不空三蔵の五台山文殊信仰宣布における文殊像」高野山大学創立百十周年記念論文集編集委員会編『高野山大学創立百十周年記念　高野山大学論文集』高野山大学，1996 年．中田美絵「五台山文殊信仰と王権―唐朝代宗期における金閣寺修築の分析を通じて―」『東方学』117，2009 年.
[12] 前掲註 11 岩崎 1993 論文，1996 論文.
[13] 前掲註 3 頼富論文.
[14] 梶谷亮治「諸文殊図像」有賀祥隆ほか編『醍醐寺大観』2，岩波書店，2002 年.
[15] 『大日本仏教全書』60（鈴木学術財団），277 頁 b～c.
[16] 宇野茂樹「比叡山文殊楼成立と文殊諸尊像」『大阪商業大学論集』82・83，1988 年.
[17] 奪然が請来した五台山文殊については次に詳しい.
荒木計子「奪然将来の五台山文殊の行方」『学苑』668，1995 年．同「奪然将来〝五台山文殊〟と「延暦寺文殊楼」及び「文殊会」」『学苑』674，1996 年．同「奪然将来の宋代木版画「文殊像」について」『昭和女子大学文化史研究』1，1998 年.
[18] 小林芳規ほか校注『梁塵秘抄　閑吟集　狂言歌謡（新日本古典文学大系 56）』岩波書店，1993 年，80 頁.
[19] 前掲註 17 荒木 1995 論文.
[20] 小島裕子氏は，当該歌謡は奪然在世中ではなく後代のものであることに注意を促しつつ，日本での文殊五尊像の形成を考察する研究に変わりなく有効であると評価している．小島裕子「五台山文殊を謡う歌―『梁塵秘抄』より，嵯峨清涼寺奪然の五尊文殊請来説を問う―」真鍋俊照編『仏教美術と歴史文化』法蔵館，2005 年.
[21] 前掲註 17 荒木 1995 論文.

[22] 奥健夫「中尊寺経蔵の文殊五尊像について」『仏教芸術』277，2004 年（のち「中尊寺経蔵の文殊五尊像」として改稿し，浅井和春・長岡龍作編『中尊寺の仏教美術　彫刻・絵画・工芸（平泉の文化史 3)』吉川弘文館，2021 年に所収）.

[23] 増田政史「安倍文殊院騎獅文殊菩薩像考」『MUSEUM』673，2018 年.

[24] 前掲註 1 金子 1992 書籍.

[25] 東京国立博物館文殊五尊像についての先行研究は次の通り.
松下隆章「康円作騎獅文殊像胎内納入稚児文殊出現図に就て」『日本美術協会報告』60，1941 年．同「稚児文殊出現図　金剛般若波羅蜜経見返絵（原色版)」『美術研究』203，1959 年．西川杏太郎「仏師康円と騎獅文殊五尊像―大東急記念文庫蔵造像関係文書に因んで―」『かがみ』3，1960 年．根立研介「施主と仏師―康円作文殊五尊像の造像を中心として―」京都大学美学美術史研究会編『芸術の理論と歴史』思文閣出版，1990 年．浅見龍介・山本勉「文殊菩薩及び侍者像（東京国立博物館）（大東急記念文庫)」水野敬三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇 11，中央公論美術出版，2015 年.

[26] 谷口耕生（作品解説)「春日文殊曼荼羅（奈良国立博物館)」奈良国立博物館編『国宝　春日大社のすべて』奈良国立博物館，2018 年.

[27] 増田政史「鎌倉時代の文殊菩薩像の展開と信仰に関する研究」『鹿島美術研究』年報 35 別冊，2018 年.

[28] 『大和志料』中，養徳社，1944 年，598 頁.

[29] 内田啓一「西大寺叡尊及び西大寺流の文殊信仰とその造像」『美術史研究』26，1988 年．藤澤隆子「文殊化現の場」頼富本宏編『聖なるものの形と場』法蔵館，2004 年.

[30] 追塩千尋「叡尊の諸信仰と慈善救済事業」『南都仏教』40，1978 年（のち同『中世の南都仏教』吉川弘文館，1995 年に所収）.

[31] 前掲註 29 内田論文.

[32] 堀池春峰「南都仏教と文殊信仰」『大和文化研究』14-2，1969 年（のち同『南都仏教史の研究』下，法蔵館，1982 年に所収）.

[33] 上田純一「平安期諸国文殊会の成立と展開について」『日本歴史』475,1987 年．中野祥利「平安後期の諸国文殊会」『歴史研究』42，2005 年.

[34] 吉田文夫「忍性の社会事業について」笠原一男編『日本における社会と宗教』吉川弘文館，1969 年.

[35] 追塩千尋「忍性の宗教活動について」『仏教史学研究』22-2，1980 年（のち「忍性の宗教活動」と改題して，同『中世の南都仏教』吉川弘文館，1995 年に所収）.

[36] 小林剛「般若寺の鎌倉再興について」『大和文化研究』11-3，1966 年.

[37] 中尾堯氏は「般若寺文殊菩薩像造立願文」に記される奉籠物のうち仏舎利に着目し，生身の文殊とされていたと指摘している．中尾堯「叡尊にみる生身仏の信仰」大隅和雄編『鎌倉時代文化伝播の研究』吉川弘文館，1993 年（のち中尾

堯『中世の勧進聖と舎利信仰』吉川弘文館，2001 年に所収）.

[38] 最勝老人像と仏陀波利像の造立については記録がないが，おそらく同時期に制作されたと考えられている．長谷川誠「最勝老人像左手残欠及び優塡王像太刀」『大和古寺大観』3　元興寺極楽坊　元興寺　大安寺　般若寺　十輪院，岩波書店，1977 年.

[39] 長谷川誠「文殊菩薩騎獅像」「四侍者立像」奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』14　西大寺全（補訂版），岩波書店，2001 年.

[40] 水野敬三郎「文殊五尊像」奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』13　唐招提寺 2（補訂版），岩波書店，2001 年.

[41] 山川均「忍性と石造物」奈良国立博物館編『忍性―救済に捧げた生涯―』奈良国立博物館，2016 年.

[42] 岩井共二（作品解説）「文殊菩薩五尊像（奈良　唐招提寺）」奈良国立博物館編『忍性―救済に捧げた生涯―』奈良国立博物館，2016 年.

[43] 淺湫毅「金戒光明寺の文殊菩薩騎獅像および眷属像について」『戒律文化』6，2008 年.

[44] 前掲註 43 淺湫論文.

[45] 伊東史朗「鎌倉・室町時代の美術」木津町史編さん委員会編『木津町史』本文篇，木津町，1991 年.

[46] 近年の X 線 CT スキャン調査で，像内に巻子などの品や，厨子入りの文殊菩薩小像などが納められていることが判明した．山口隆介「〈展示品のみどころ〉文殊菩薩騎獅像（京都　大智寺）」『奈良国立博物館だより』113，2020 年.

[47] 田中義恭（解説）「木造文殊菩薩及侍者像（橿原市戒外　興善寺）」奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『飛鳥の仏像』同朋舎出版，1983 年.

図 版 出 典

図 1：敦煌研究院主編『敦煌石窟全集』2，商務印書館，2002 年

図 2：ジャック・ジエス編『西域美術』2，ギメ美術館ペリオ・コレクション，講談社，1995 年

図 3：奈良国立博物館編『大勧進　重源　東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出』奈良国立博物館，2006 年

図 4：金子啓明『文殊菩薩像（日本の美術 314）』至文堂，1992 年

図 5：有賀祥隆ほか編『醍醐寺大観』2，岩波書店，2002 年

図 6，9：東京国立博物館提供（Image: TNM Image Archives）

図 7：NHK 仙台放送局・NHK プラネット東北編『平泉　みちのくの浄土』NHK 仙台放送局，2008 年

図 8：奈良国立博物館編『快慶　日本人を魅了した仏のかたち』奈良国立博物館，

2017 年

図 10：国立文化財機構所蔵品統合検索システム　ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）

図 11：奈良国立博物館編『奈良西大寺展　真言律宗一門の秘宝公開』（第 2 版），日本経済新聞社，1991 年

図 12：奈良国立博物館編『忍性―救済に捧げた生涯―』奈良国立博物館，2016 年

図 13：金戒光明寺編『大本山くろ谷金戒光明寺宝物総覧』浄土宗大本山くろ谷金戒光明寺，2011 年

図 14：三井記念美術館・あべのハルカス美術館・山口県立美術館ほか編『奈良　西大寺展　叡尊と一門の名宝』日本経済新聞社，2017 年

図 15：奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『飛鳥の仏像』同朋舎出版，1983 年